



Vol. 128

## CONTENTS

- 【コラム】小さな町での ICT 支援～コロナ禍以前～…渡邊 景子  
【解説】教科「情報」の大学入試に備えるー共通テスト「情報関係基礎」の解説サイトを運営してー…松島 拓路  
【解説】業務を止めないテレワーク環境～業務端末の仮想化による環境分離～…西村 浩二



## COLUMN

### 小さな町での ICT 支援～コロナ禍以前～



「タブレット貸与式」から筆者とこの町の関係はスタートする。2017年春のことだ。それまで都内の私立小学校で使われていた30台のAndroidタブレットが役目を終えたので、そっくりこの町に無償で貸し出されることになった。「なぜわざわざ貸与式を？」当時のM教育長が仕込んだこの貸与式のねらいは、地元新聞記者を呼んで「この町の学校でタブレットを使い始めるぞ！」と決意表明を記事にしてもらうことであった。

何年も前からこの町はキャリア教育を推進してきた。「子供たちに夢を持たせたい。多くの子供たちはいずれこの町を離れていく。“この町ではお金にならないから…”ではなく、“ああいう人になりたい”、“これをやりたい”、と夢に向かって町から巣立ってほしい」とM教育長。筆者の知り合いのICT活用に長けたK先生が、たまたまこの町に教頭として2年前に赴任し、先生たちの困りごとをICTで解決して見せた。ICTの力を確信したM教育長は、彼を町の指導主事に任命した。

偶然は必然だった。筆者はK指導主事に呼ばれて貸与式に参加し、教育長の熱意に触れ、町のICT支援を買って出ることに。そしてスーパーティーチャーH先生との出会い。小学6年生にGoogle Slideを使って町のパンフレット<sup>☆1</sup>を共同制作させ、わずか1週間で完成させた実力を持つH先生。借り受けたAndroidタブレット活用のために、H先生、K指導主事、筆者の3人で勉強会を行い、Viscuitプログラミングを教科で使う九州のT先生の実践を紹介した。期待通りH先生は担任していたクラスでViscuitの「ローマ字シューティング」などを伝授し、30台の中古Androidを使い倒してくれた。そして翌年、町外へと異動された。

案あれば苦あり。2018年、H先生が去った後、タブレットの活用はなかなか進まなかった。しかしK指導主事は黙々とインフラ整備・ハードの拡充に邁進した。それまで各校で10台配備していたiPadを1クラス分(約30台)に増やし、どの教室からでもインターネット接続できる環境を整え、授業単位で1人1台を実現させた。またこの年、ICTに超前向きなデジタル・ネイティブのU先生が町に赴任した。彼女は小学2年生の国語でViscuitを使った授業を展開した。2019年度末には彼女の力を借りて町全体のプログラミング研修会を開催するまでに至った。

GIGAスクール構想とコロナと新学習指導要領が三位一体でやってきた2020年。3月にはK指導主事が町外に転勤。たすきを渡された筆者は、毎月1、2回現地でICT授業支援を行うことにしていたが、コロナの影響でほぼ全面的にオンラインでの支援となり……と、本稿ではこの辺りのことを中心にお伝えする予定だったが、そもそもを語るだけで文字数を使い切ってしまった。コロナ禍下のお話はまた別の機会に。

<sup>☆1</sup> 棚倉小学校、児童作成棚倉町パンフレット(2022年2月1日参照)、<https://tanagura.fcs.ed.jp/棚倉小学校/児童作成棚倉町パンフレット>



渡邊景子(東京女子体育大学・東京女子体育短期大学)(正会員) keiko@iisa.jp

東京女子体育大学・東京女子体育短期大学准教授。東京学芸大学大学院(修士)卒業。小学校教員、派遣社員、いわき明星大学嘱託職員、同理工学部助手、聖心女子大学非常勤講師、(ときどき無職)を経て、現職。